「防災小説」

三月十四日、突然「地震です。地震です。」と街中に緊急地震速報のサイレンが鳴った。

僕は、友達二人と鶴形沼で釣りをしている。

警報が鳴り始めて、数秒後のことだった。地鳴りとともに震度七強の激しい揺れに襲われた。「やばくね」「どうする」としゃがみながら叫んだ。しゃがんでいても転びそうになる。沼を見ると、魚が次々と跳ねている。一分ほどで揺れが収まった。「とりあえず家に帰ろう」と思った。しかし、家に向かう途中でさらに地震が起こったり、道路に亀裂があったりするかもしれない。「だめだ。家に帰る途中で何が起こるかわかんないよ。だから、近くの避難所に逃げよう。」

急いで東部公民館に向かって自転車のペダルを漕いだ。道路には亀裂が入り、木が倒れているところもあったが、なんとか無事に公民館に着くことができた。すでにたくさんの人が避難していて、すぐには中に入ることがで

きなかった。

ようやく中に入って少し落ち着いたら、家族のことが心配になった。父は家にいる。祖父母は家の近くに住んでいる。その時、緊急ダイヤル171を思い出し、かけてみたが家族の安否は分からなかった。とても不安になる。日が暮れ始め、その日は友達と三人で避難所に泊まることにした。翌朝になっても家族の安否は確認できない。余震が収まった頃、家に帰ることにする。家に着くと、向かいの家の木が倒れ、向かいの家を真っ二つにしていた。急いで家に入ると、棚が倒れ、物が散乱している。父と兄がいた。「爺さんと婆さんは大丈夫だったの？」「大丈夫だったよ。」それを聞いてとても安心した。しかし、母の姿がない。数日たって経っているのに帰っていないのでとても心配だった。夕方5時頃、ようやく母が帰ってきた。とてもとても安心した。

二年　佐藤琉斗